うえだ

社団法人 上田高等学校同窓会関東支部会報

第14号

12月1日（月曜日）

1975（昭和50年）

季刊

発行所
上田高等学校同窓会関東支部事務局
発行責任者　大森頼雄
編集責任者　花岡椿
埼玉県川口市並木2－11－20
矢島鋳工㈱内
電話　0482－53－2662（代表）

題字は故稲垣征夫氏筆

本会事務局の「所在表示」変更
埼玉県川口市並木町二の十一の六は川口市、並木二の十一の二十に変りました。

感激の渦

太郎の山峯…
千曲の清流…

青春ここに甦り

そして…古城の門に想いを馳す

第十四回関東支部大会――報告記

農林年金館の正面玄関を入ると直ぐそれと判る本大会の受付の華やかな情景が眼に写る。定刻前既に可成りの集まりとなり、ロビーでは夫々グループ毎に歓談、第一四回大会が今まさに始まろうとしている独特の雰囲気が感じられるひとときである。

定刻の午後六時を少々過ぎた頃小林副幹事長の司会で定期総会開会の幕が切って落された。新副幹事長として前回は多少不馴れである。本大会委員長でもある尾台副支部長の開会の辞に続いて、一同起立して校歌斉唱。春繻渺の千曲の清流、秋玲瓏の信濃路の空を偲びつつ、故郷に思いを馳せる一瞬である。大森支部長の例の怒鳴りつける様なと言っては少々オーヴァーであるが、いつもの蛮声をはりあげる挨拶があり、続いてこれまたヴォリュームのある神野幹事長の会務・事業計画報告、柳沢監事の監査報告等、議事は順調に進行する。特に会計報告は前回の会報にも記載されてある様に、会計幹事諸兄の努力によって、今迄未納であった多数の会員から会費がドット納入された結果、余裕のある運営ができる様であり、これを報告する林会計幹事の表情が誠に明るいのも宜なるかなである。

矢島副支部長の閉会の辞で第一部は終り、第二部の懇親会に移る訳であるが、その前に母校の柳沢校長を始め来賓の方々の紹介が行われた。来賓一同ずらりと演壇の上に並び、一人一人について矢島副支部長がユーモアのある紹介をする訳である。来られた方々は、本部同窓会竹内理事、母校柳沢校長、岩下前校長を始め諸先生、又前市長の小山参院議員、僚友校としては上田東、北佐久農業、小諸野沢北、皐月（長野）、伊奈北、松商学園、松本松南の各校役員の方々である。更に特筆すべき事として萩原周伯夫人も参加された。周伯は既に他界されたが、母校の当ての恩師でもあった方。周伯が遺された、水蓮をモチーフにした五〇号大の立派な作品を同窓会に寄贈なさると云う夫人の御意向が小林副幹事長を通じて我が同窓会に伝えられたので、有難く頂戴致す事とし、これは結局本部に寄贈する事となり、同窓会館に飾られる筈。

そして更に、前回も催されたのであるが（32）中村氏、（42）横田氏等の御尽力で文化放送の出前寄席が一興に花を添えた。

次は愈々二部の懇親会である。七時過ぎ柳沢副幹事長の司会で会は始まった。各期夫々まとまってテーブルを囲み、飲み且つ喰うの歓談の風景は例年の通りである。そして今迄はここに一つのアンバランスが有った。それは若年グループのテーブルの料理はやがて残り少くなる半面、老年組のテーブルは依然として盛沢山、それを後輩連中が遠慮して唯眺めている丈というのは宜しくない、という訳で、今回からは無礼構として先輩グループの所にもおしかけて遠慮なく頂くというのは一つの進歩である。宴酣になるに「夕日千曲の水の面に映える」凱歌、「松尾城頭」の応援歌、「真田が丘に紅葉燦と輝く」柔和会の歌。蛮声のひびきは不景気を吹飛ばさんばかりの勢である。会も次第に終盤に近づいて来賓の方々の御帰りの時刻である。そこで神野幹事長の司会で会員一同手をつないで一大円陣を作り、「蛍の光」の斉唱である。その中を来賓一同一列になり矢島副支部長の先導で静々と退場。演出効果仲々宜しい。楽しかった盛大な大会も遂に終った。

（35）石倉謙一記

御挨拶にかえて

支部長（23）大森　頼雄

皆様益々お元気ですか。去る六月わが関東支部第十四回大会も盛会に無事終了することができましたことは誠に同慶の至りで、これは全く、会員の皆様方および幹事諸君特に大会準備委員の方々の絶大なる御協力御支援のおかげでございまして厚く御礼申上げます。然し一部の会員より、また幹事会の大会の反省会においても、大会の運営について、いつも話して、食べて飲んで歌って、何の変りばえも無いでは無いかとの意見また反対にそれこそ同窓会のほんとの姿であって、それで会員相互の親睦を深めることができるのならそれで良いのではないかとの全く相異った意見がたたかはされており、結局それで良いとの多数意見によって毎年運営されてきたのが従来の実情であります。私も当初より長い間引続き幹事としてみてきまして、いつも皆様のだんんのご様子を拝見してこれで良いのだ、特に短時間の会合で何か変った催物との計画は無理だと感じています。さて支部の事業としては会報うえだは順調に成長を続けておりつぎに支部会員名簿の新版の発行であります。これも長い間検討され準備も進み、来年五月を目途としていますので、できるだけ正確な名簿ができますよう資料の提出広告掲載等会員の皆様方のご協力を切にお願申上げます。なお来年三月末をもって、幹事改選となりますので各期の皆様は早目に十分連絡をとり、新しい有能な幹事を選出下さるようお願いいたします。また私は支部長は一期で交替して順次若返って行くのが良いとの信念により残期間を従来どおり相務めますが、長らくの皆様方の御協力に対して重ねて感謝の意を表し、当支部の益々の発展と皆様の一層の御健勝を祈念してご挨拶といたします。

時やよし、明年五月

第十五回大会を迎うるの年

待望の「会員名簿」発行！

へき頭、本会々員諸兄におわびしなければならないのは、本春発行された会報第十三号紙上において、関東支部会員名簿の発行予定を本年十一月とお伝えしておいたのが、明春五月と延期されたことであります。

去る九月下旬、幹事会を開催第十四回関東支部大会の反省会をひらくとともに、名簿発行についても種々検討を願い、より完全な名簿を作るべく、編集委員からもお願い申し上げ名簿発行は明年五月末に完成し、六月の第十五回大会日に希望者へ配布もしようと決定させていただきました。

会員諸兄の御了承を、ここにお願い申し上げる次第であります。

×××　×××

さて、名簿編集については、次のような手順によって編集を進めて参りました。

一、関東支部名簿は第一回目発行が昭和三十四年四月、第二回目発行は四十二年五月、既に八ヶ年の才月が流れています。しかし先年四十七年一月に上田高校同窓会本部において、すばらしい同窓会名簿が発行されましたことは、諸兄御存知の通りであります。

この本部発行による名簿の中から、関東地区在住者をひろい従来あった関東支部名簿と照合補足して事務局の名簿を一応整理しました。その結果、関東支部会員数は三、八三二名と相成り、従来の支部会員数一、八三九名を、はるかに凌駕、実に約二千名の増加となった次第であります。

二、しかしこの補足、整理された事務局の名簿により、四七年四八年、四九年、そして五十年五月まで、各年二回の会報「うえだ」を発送して参りましたが返送されたり、会員の移転通知あり、各期幹事からの同期生移転連絡等々がありまして、本年九月現在では約三千名が会員の掌握実数であります。

三、本年四月十八日、第十四回大会打合せの幹事会において、事務局にある各期名簿の写しを当夕各期代表幹事に手交し、更に訂正をお願いし、返送を受け原簿訂正につくしました。

四、六月、第十四回大会の出欠返信（会員自筆）によって、更に原簿を訂正、引続き各期毎の名簿を再整理中であります。

年末から正月にかけ、名簿編集委員諸兄には、まだまだ多忙な日々がつづくことと思います。

附記　各期それぞれに同期会があり、各期の代表幹事諸兄には、再三にわたり名簿編集については多大な御協力をぬがっています。

しかし、六十期以下の若い期の諸君には同期会に集い無き期もあり、また代表幹事もなき期もあるため、同窓会本部の現在の資料を参考にさせていただくべく連絡中であります。

最後に、各期代表幹事諸兄、また会員個々において名簿発行計画のあることを知り、いろいろと御協力、御忠告下さった方々へ紙上から厚く御礼申し上げます。

名簿編集委員（31）
矢島五郎記

◎名簿発行について

一、発行予定　昭和五十一年五月

一、型状　A五版

一、登載人員　約三千二百名（増加見込）

一、会員記載事項　（氏名）（郵便番号）（現住所）（自宅電話）（勤先名称及び役職名）（勤先電話）（出身地）

一、名簿代金　金一千円也

注　名簿の申込み、代金支払方法、郵送希望等については、明春五月発行の会報、「うえだ」に詳細お知らせ致します。

一、広告募集

全頁代金　金、弐万円也
½頁代金　金、壱万円也
¼頁代金　金、五千円也

申込〆切　五十一年二月末日

申込先　本会事務局へ、電話可

◎広告について更に加筆

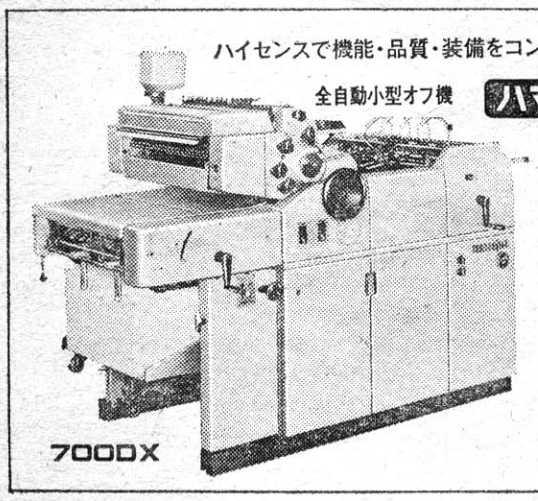
名簿の代金、一部千円也は、原価ギリギリであり、多数会員諸兄の広告申込みによって補塡致したいと願っています。

現在、各期の代表幹事諸氏によって、各期毎に広告の募集に御尽力を願っていますが、まだまだ不充分、ふるって会員諸兄の御協力をお願い申し上げます。

安価に会員諸兄に名簿をお分け致したい願望から、一層の広告申込みに御協力下さい。

以上

ハイセンスで機能・品質・装備をコンパクトした
全自動小型オフ機
ハマダスター 700CO 700DX 600CO 600DX



〒103　東京都中央区日本橋兜町2-42 兜ビル
東京ハマダスター株式会社
電話（03）667－0061（代表）
代表取締役社長　清水幾男（38期）

精密歯車装置設計製作
精密機械仕上加工及組立
若葉精密工業株式会社
取締役社長　土屋学（31期）（丸子町出身）
専務取締役　土屋博（47期）（〃）
取締役　土屋孝（44期）（〃）
東京都目黒区八雲2－8－5
電話（723）1717（代表）

おめでとう小山敬三先輩

浅間を描いて文化勲章

ことしの文化勲章受章者に小山敬三さん（洋画家、14期・小諸市出身）が選ばれた。本校出身者としてはもちろん、長野県人としてもはじめての受章だっただけに、出身地の小諸市に「市立小山敬三美術館」が開設されるなど、県下では大きな話題を集めている。同氏は、文化の日の十一月三日、数学者の広中博士などと一緒に皇居で三木首相から栄ある勲章と勲記を受けた。関東支部としても、ここに心からなる祝意を述べるものである。

晴れの文化勲章受章者となった小山敬三画伯は、明治三十年、小諸市に生れた。

わが上田高校（当時は中学校）には、明治四十三年に入学、大正四年に卒業している。

卒業後、慶大予科に進んだが、一年ほどで中退、川端画学校に入学して、洋画家としての第一歩を踏み出した。

大正九年、フランスに留学、パリのアカデミー・コロラッシュに学ぶが、この渡仏のかげには、郷土の文豪・島崎藤村の激励と助言があったといわれる。

帰国後は、春陽会、二科会に属して、旺盛な制作活動を展開するが、まもなく安井曾太郎などと、一水会を組織し、その中心人物となる。

昭和三十四年には、一連の作品「白鷺城」で、日本芸術院賞を受賞する一方、同四十八年からは日展顧問をつとめるなど、洋画壇の重鎮的な役割りを果たしてきた。

以上、簡単にふれ画伯の経歴を紹介したが、その作風は、安井曾太郎らの流れをくみ、大ぶりで知的な構成力に富む画面と、正攻法に立つ悠容たる画体に特色があるといわれている。

最近作には「初夏白鷺城」や、郷土の小諸に材をとった「初冬浅間山」「紅浅間」などがあるが、氏の今回の壮挙が、同窓生の一人としても長野県人としては初めてであることを思えば、喜び極まりないものがある。

「おめでとう、小山敬三さん」

（副支部長・矢島記）

郷里に美術館を寄贈

文化勲章受章者で、小諸市出身の洋画家、小山敬三画伯が、郷里の小諸市に寄贈した「市立小山敬三美術館」は十一月二十六日開館した。小山氏の文化勲章受章に花をそえる開館で、関係者は「名誉市民である小山氏の芸術を、永久に伝えることができる」と喜んでいる。

美術館は、若き日の小山氏に、フランス行きを勧めた島崎藤村ゆかりの懐古園内に設けられた。

建物は芸術院会員で、建築界の大御所の村野藤吾氏のユニークな設計によるもので、鉄筋コンクリート平屋建て二〇八平方㍍、展示室は二室、収納庫、展望室などがあり、さらに、除加湿機、防犯設備なども備えられた立派なもので小山氏が私費約四千四百万円を投じて建設したものである。

館内の展示作品は、小山氏がかねて〝美術館のために〟と手元に残してきた旧制上田中学二年（明治四十五年）時代の作品「盛夏樹林」、フランス留学時代の「トレド遠望」、さらに不朽の名作といわれる代表作「浅間山夕月」「初夏白鷺城」など二十七点が展示されている。絵画は合わせて時価約五億円といわれ、絵画、美術館とも「郷土の文化向上のために」と小諸市に寄付、同市が管理、運営する。

この日行なわれた開館式には、小山氏と同時に、文化勲章を受章した田崎広助氏をはじめ、中村琢二氏、高田誠氏らの洋画家仲間、哲学者谷川徹三氏、さらに岡田護東京国立美術館長、河北倫明京都国立美術館長、また小中学校時代の同窓生、地元関係者など約三百五十人が出席した。

テープ・カットは、小山画伯と設計者の村野氏と、地元の小諸市長小山威雄氏の三氏によって行なわれ、続いて館内に入り、作品が公開された。

参会者一同は、ゆるい曲面と、淡い光の中に飾られた〝小山芸術の妙〟に、一様に感嘆の声をあげていた。

受章コンビの〝結晶〟

この美術館の設計者・村野氏は赤坂迎賓館、東京御所などを設計した日本を代表する建築家で四十二年に文化勲章を受章している。この村野氏と小山氏の芸術家同士の深い友情から生まれたのか、この美術館で、地元では、文化勲章受章コンビによる〝芸術の結晶〟だと感激している。

小山氏が、美術館建設を考えたのは、四十八年前、フランス留学中に、パイヨンヌという田舎町で同地出身の画家、レオン・ポンナが建てた美術館を見て、いつか小諸にも…と考えた時からのこと。

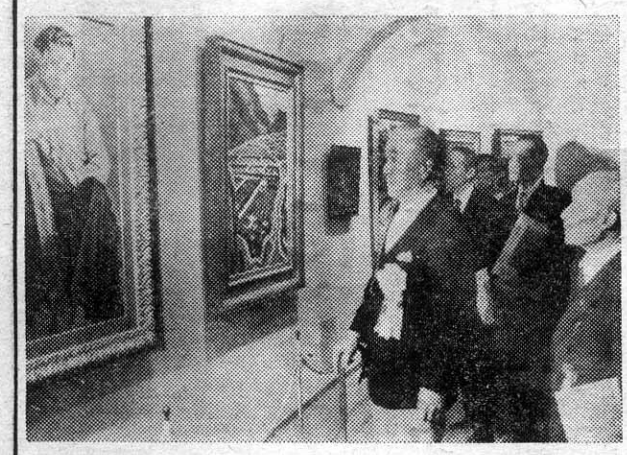
友人の永い間の夢の実現に、村野氏は「どうしてもお手伝いしなければ…」と協力を約束。昨年の十一月起工以来、しばしば、現場を訪れ、一年がかりで完成したもの。

曲線を多用した壁、床、天井の傾斜構造など芸術的設計で、なに上りも小山氏の作品を生かすよう配慮したということである。

小山氏は「四十八年前の夢がようやく実った」と語り、村野氏は「この美術館は、手塩にかけた子供と同じだ」と開館を喜んでいた。

同美術館の入場料は、一般百円（団体七十円）小中学生四十円（団体三十円）で、毎週水曜日と祝日の翌日は休館する。

【写真説明・（上）開館式のテープカットをする小山敬三氏（中央）と村野藤吾氏（左）小諸市長小山威雄氏（下）は参観者に展示品を説明する小山画伯】



「啓明会」こそ心のふるさと

一枚の写真が送られてきた。そこには、去る七日、新宿の地球会館で開かれた啓明会に出席された面々があった。とくに染谷丘出身の才媛の姿がひときわ、きわだっていた。

当時、上中生になることは少年の憧れであり、そこにははてしなく続く夢があった。それはすべてが美化された形で心をひきつけ、若人は青春の息吹きを啓明会に求めた。

依田窪近郊から、いまは名残りをとどめない丸鉄で通学できた五星霜こそ甘き追憶となってのこるロマンを、淡き恋心を高女生にいだいたもの、上級生の特権である座席の占有を享受することに生き甲斐をかけたものいろいろである。とにかく勉学一途であったことは事実である。ともあれ、上田東駅までの二十六分間はかすかずかのエピソードの生まれる場となっていた。

十曜日の午後に丸子小学校に集まり、サッカー、野球にうち興じ運動が終ると、肩をくんでの寮歌凱歌の蛮声は森にこだまし、青春を謳歌したものである。丘の上で上級生からきびしいご指導を頂戴したのもそのころである。いまの教育に欠けているもの、心の交流連帯感などはそこにあった。上級生は常に下級生に範を示した。これほど自覚と気概を養う場はなかった。このようにして、友情は培われ、友の悲しみ、喜びを共にする気風はみなぎっていった。

月に一回、塩川の餅菓子を前にして上級生の訓話を拝聴したのは懐かしいひとこまであった。

年の暮、丸子公園での五年生を送る会は徹夜するのが恒例とされ、啄木の詩などを吟じながら将来を語り合ったものである。また、試胆会は夏の夜をにぎわした。

絆が大きな輪となり人間の形成に役立っていった。とりわけ世間がのんびりしていたとも思われない。上中生という存在を地域社会が認めてくれたのではないだろうか。

あれから何年かたつ。啓明会員は進路こそことなれ、あちこちで活躍されていると聞く。

生涯に自己をかけてみることである。

在京啓明会は年に二必ず幹事のみなさんの献身的なご尽力により開催される。規模も年ごとに拡がり、染谷丘出身者もふえているといううれしい知らせも届いている。会員は期待にこたえ、都合をつけて参加することである。会は出席することに意義がある。

昭和50年7月12日（於・新宿の地球会館）

柔和会副会長　布施信夫先輩逝く

（40）小林郷司

十月五日午後一時二十分、布施信夫先輩が急逝された。享年七十七歳。（病名は閉塞性黄胆といわれる。）

布施先輩は上田中学の柔道部の集まりである柔和会の東京支部長を稲垣先輩亡き後永く勤めて戴き各支部長として稲垣先輩に勝るとも劣らない手腕を発揮された。その徳望を慕う者は柔和会のみならず、上田高校同窓会関東支部幹事会においても数多く、穏かな中にも底には、柔道の道を学ばれたりんことした厳しさを持たれた風貌が今更ながらしのばれる。

柔和会の運営に当っては要所だけを確かめて後は幹事を全面的に信頼して下さり、物心両面において細かい御配慮を戴いたその暖かいお気持を考える時、あの頭に白髪をいただいた温顔の貴影を涙にかすんで、いまさらながらその遺徳の深さが思いやられる。

昨年、柔和会も組織改革されて供田誠先生を名誉会長に仰ぎ、布施先輩も推されて、副会長となられ、一段と柔和会の発展が期待される時に、今その中心的存在である先輩が急逝されたことは返す返すも残念でならない。

葬儀は七日午後から歯科医開業以来五十星霜経た西巣鴨の御自宅で歯学関係、町内関係の多くの方の哀悼の意を捧げる中に、厳かな中にもしめやかに行われ、その徳を慕う弔問客は後を断たず、盛大であった。

心からご先輩の御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

当会よりの弔問者次の通り。

六日通夜列席　（37）岡清助（41）小林郷司（42）横田種雄（29）田原英勝（54）小市則夫ー以上柔和会

七日葬儀参列　（9）古松国幹（19）藤原行、今井武（21）島田次郎、西沢慶二郎（22）岩波東平（28）小山陽太郎（31）矢島五郎（32）高見沢澄平ー以上同窓会（26）坂田睦雄（29）井原寛、岩下美千穂（34）佐藤祐三（41）小林郷司（44）柳沢広（夫人代行）（54）小市則夫ー以上柔和会

コンクリート造住宅の再検討（1）

（35）石倉謙一

これから我が家を建てようとする人の中には「木造では物足らない。それに地震や火事の時に不安だからコンクリート造にしようか」と考えている人も居る。然し木造、然らずんばコンクリート造と考えを飛躍させることは果たして何んなものであろうか。コンクリート造の家について改めて考えて見ることにした。

コンクリート造の特長としては木造に比べて火事や地震に強いことは前述の通りであるが、その外に耐用年限が遙かに長いという点が挙げられる。併し建物の耐用年限は必ずしも物理的、機械的の強さ丈では測り切れない所に問題がある。戦前に建てられた古いビルが取毀されて、その跡に高層の近代的ビルが新築されるという例がよく有るが、これは必ずしも古いビルが老朽化して危険になったから取毀すというのではない。建物はまだまだ十二分に持つのであるが、その機能が現在の企業活動について行けなくなったからに外ならない。

住宅の場合も恐らく似た様な事態になるかもしれないという懸念がある。

（以下次号に）

日本の伝統文化を守る

神野文芸学園

学園長　神野勝男　（36期）

船橋市前原西2—32—15

電話　0474—74—0543

一級建築士事務所

柏葉設計所

主宰　石倉謙一　（35期）

〒177　練馬区富士見台1—9—20

電話　03—999—2401

或る先輩について

（36）伊藤東四次郎

世の中には、奇特な方がいるもので、自分の事はてんで顧みず、こと、野球、それも上田高校に関すると、寝食を忘れて、とびまわっている人がいます。此の人が〝ずっこけ在校録〟なるものを書いている中村礼三先輩、その人であります。

此の方のお蔭で、小生は、ぎすぎす、せかせか、あくせくしている東京に居て、何とも楽しい、豊かな気分で、暮していられるような気が致します。

昨年の秋、「信州屋さん、渋谷の福寿司で東京の松尾球友会を開くから、出ておいでや」といって来られました。

「先輩、アサヒビール壱箱寄附しやしよう」と申し出たら、中村先輩がわざわざバイクにのって、四谷までとりに見えられたので、一層頭の下がる思いでありました。

福寿司での球友会は大変たのしいもので、殊に、明治大学の丸山投手と東京大学の渋沢捕手が共に夫々のチームのキャプテンに選ばれたというので、野球では身の狭い思いをして来た小生にとっては、何だか二人が小生のコンプレックスを取除いてくれたような誇らしい気持になり、昂然と杯をたのしく重ねました。そのうちに矢島先輩も加わり、たいへんなとんちゃん騒ぎとなりました。

此の春の六大学リーグ戦の東明戦に、中村先輩の御案内で、ネット裏に陣どっておった所へ、六大学公式審判員の山崎君が見えて、こちらへこちらへとよい席に連れて行ってもらって、東明戦をたのしく観戦させて頂きました。その時の事は矢島先輩の観戦記が出ると思いますので、省略致します。

この秋の六大学は春の覇者明治大学と最下位の東京大学が第一戦にあたるというので、土曜日、中村先輩のおさそいを受け、岩下元校長先生と小生の三人で、神宮球場のネット裏で観戦しました。渋沢捕手と丸山投手の対決をたのしみにしておりましたが、先発は丸山でなくがっかりしていた処、丸山がすぐ交替して出て来たので、我々三人は大喜びでした。何しろ中村先輩の解説付きで見ているんだから、楽しい事この上なし。両軍投手の好投しなかなか点にならず、明治がやや押し気味ながら東大の好守に阻れているといったゲーム展開でしたが、六回に明治がホームランで一点を上げたので、丸山の力投からみて、一対〇で明治の勝ちと思われた試合でありました。ところが、七回東大の先頭打者渋沢が、力投していた丸山から、痛烈な右翼二塁打を奪って出塁しました。場内割れんばかりの大歓声です。丸山は渋沢に打たれて力みすぎたのか続いてまた右翼二塁打、そして更に三塁打と長打を三本喫して、二点とられ、遂に二対一と逆転され、更に八回にはスクイズで一点とられ、明治は一対三で大事な緒戦において、最下位の東大に敗けてしまいました。

三人は丸山と渋沢の活躍と見られる事が出来たので、大喜びでありました。

その翌日の日曜も明大は連敗して、春の覇者明大が最下位の東大にしてやられたと大きく報ぜられるのをみて、明大の秋の前途は絶望的と思っておりました。

所が、そのあと丸山投手の力投につぐ力投により、明大八勝のうち、七勝のすべてを丸山がその右腕で勝ちとるとこの戦いぶりは、皆様がよく御承知の所で、明大は奇跡的な春秋連覇をなし遂げたのであります。

その明大の優勝パレードが昨日神宮球場から新宿通りを経て駿河台まで華々しく行われました。早々とパレード加わろうと、酒を買いに来た学生に「明治の優勝おめでとう」と祝福したら、「ありがとうございます」と心から嬉しそうでした。「丸山は私共上田高校の後輩だよ」と誇らしげにいいましたら、「やや先輩、ありがとう。丸山は神様です。商学部の私の学友に上田高校を出たのがおります。上田高校おめでとう。」と酒も入っていないのに、酒を飲んだ如き昂奮ぶりでありました。

それから相当の長い時間がたって、既に真暗になってから、うちの店の前の新宿通りを提灯の列、応援団、鼓笛隊、パトンガール等の長い隊列が、多数の酔った学生の歓声に包まれて通って行きました。明大の総長、島岡監督同乗の乗用車の次に、丸山投手が柔和な顔に、銀ぶちの眼鏡を光らせて、オープンカーの先頭に坐って手を振っているのが見えて来ました。小生は多くの学生をかきわけて、オープンカーにかけより、

「丸山、御苦労、よくやったぞ。」と手を握ってほめてやりました。「一度お目にかかりましたね」と丸山は渋谷の福寿司を思い出してくれました。車が動いてゆくので、小生も小走りに走り乍ら「また、中村先輩と一緒に祝賀会をやろうや」と多くの云いたい事の中から、やっとそれだけを云いました。そうすると多くの学生の中の一団から、「上田高校、万才!!」の歓声が、優勝の歓喜が酔い痴れた学生の中にこだましました。ジーンと眼に熱いものがこみ上げてくる一瞬でありました。こんな嬉しい感激を、何とも云い得ない感動を与えてくれたのも、中村礼三先輩です。先輩、ありがとう。そしてお互に元気で、長い青春を、これから本当の青春を謳歌しようではありませんか。（昭和五〇年十月二十八日）

棋士遍暦

（49）中山典之

六月某日、同窓会報13号が送られて来た。同時に49・50年度会費未納のむねを記入した振替用紙が同封されてある。これはまずい。小生は義理を欠いたことは、多少あるかも知れぬが、借金をふみ倒したことはない。幸い今日はヒマなので関東支部事務局へ届けることにしよう。西川口駅近くの矢島先輩を訪ねたのは六月十日のことであった。

初対面の小生を見て矢島先輩は、いきなり、

「同期だ」

とズバリ聞いて来られた。「こんにちは」もクソもない。いきなり核心にふれて来られた感じである。こうなっては致し方ない。

「49期です」

「うん、49期も池田、遠山君らが努力していてくれるが、おいも協力してくれや」

「はあ」

「何をしてる、商売は」

「碁のプロです」

「ほう、こりゃ珍しい。上田の卒業生にも変ったのがいるわい」

「日本中で同業者は三百人だけです。昼と夜がアベコベで変った商売です」

「面白そうだな。49期を代表して何か一筆、書けや」

上官の命令よろしく、ここに一文を草する次第である。書かねえと、お説教がオッカネエでや。

49期が入学したときは、昭和二十年四月、まだ上田中学の時代であった。軍事教練、勤労奉仕の経験がある最後の年代である。八月十五日敗戦、校名は上田松尾高校併設中学校となる。

三年を終って上田松尾高校へトコロテン式に入学。現在の上田高校の前名であることは申すまでもない。

六年間もお世話になった母校であるが、それはさえない時代であった。食う物がない。中学一年の時の私の体重が27kg身長124cm。今どきの小学校一年生並みである。したがって碁などという遊びは、もっての外であった。

碁のプロの団体を日本棋院と言う。（大阪には関西棋院がある）所属棋士、凡そ三百人、皆地方では大天才と言われた連中のなれの果である。そのほとんどが七・八才から碁石を手にし小学校ざえざえほって、縦横十九路の盤上に生きて来た者どもである。その中に入ると、中学三年で碁を覚えた私は、まことに心細い思いをさせられるわけである。

在校当時、教職員の中でも碁の強い？先生方がおられた。美術の小林三郎先生、林幸四郎先生、音楽の兎東武雄先生、物理の高柳厚先生、世界史の清水次郎先生、数学のギョロ先生（矢礼。たしか荒井先生であったか？）いずれも、よくもんで貰ったものであるが、半年ほど経つと逆に五十六目も置かして、もんで上げる事になった。元校長の清水先生は、現在、プロ四段の私に七子であるから、立派なアマ初段であるが、昔、私が教わったこともあって、今だに碁の講義を聞かされる。前校長の小林先生は小生に五子だからアマ三段格、立派なものである。上田の碁会で、ときどき御手並を拝見している。

三百人のプロの中で、最も出遅れた私が、棋士四段として棋院の末席をけがしているのは、一つの奇観ではある。なにが故に棋打ちになってしまったかと考えるのであるが、そもそものスタートから大錯覚があった。

碁を覚えて、半年で五級。地方の碁会を荒し回って優勝の賞品を狙う。成功率は100%である。何しろ、月に一目づつ上達していたのだから手合割が楽である。一年で初段格、丸二年経つと、東信地区では、まず恐い人はなかった。小諸の丸山三段（現在アマ五段、信州王座数回）に先で勝てた程であった。碁は何と易しいのだろう。この調子なら、あと三年もすれば、呉清源九段ぐらいにはなれるかも知れぬ。いざ、上京して、わが実力の程を天下に誇示せんとしたら驚いた。11歳、12歳の天才児が、日本棋院の院生に雲の如くいて、これがやたらに手強いのである。当時の私の棋力はアマ六段程度であったが、プロの力量に換算すると六級くらいのものであった。毎年一回のプロテストに挑戦すること九回、九年目にしてプロ初段の栄冠を射止めたときは、感慨無量。思わず母校の凱歌を低吟したものである。「誉れの現、我得たり」と。

数年前から碁が選択正課として、中、高校教育に取り入れられている。碁は将来、ますます盛んになるであろう。

先輩諸氏、後輩各位の中にも碁を打つ人は少なくなかろう。いずれ盤上で御意を得たい。また、雑誌「囲碁クラブ」誌上に小生の随筆が長期連載中であるので御高評を御願いする。

（十八回連載の予定）

（日本棋院棋士・中山典之）

北村友圭先生の長寿・百才を祝う

廿会生訪問記（20）和田斉

大正十年に上田中学を卒業したわれわれは、第二十回卒業生というので、廿会（はたちかい）というクラス会を持っている。廿会は去る七月三日桐生市に住んでおられる恩師北村友圭先生が、今年百才を迎え、なおかくしゃくとして数学塾を開いて、近隣のこどもに数学の教授をしておられるのを、お祝いするため、先生のお宅を訪問した。

集ったものは二十一名。信州から小林訓政、長谷川孝蔵、宮城博、村山重徳、小泉清明、石井汪、遠藤恭介、水沢道男、和田晋、小笠原利司、香山清和、大熊融、滝沢愛、白井要範の諸君、首都圏居住の篠原規依、小林樵夫、成沢潔水、吉井道教、和田斉、高崎市の小林熊光、大阪から峯村英憲の諸君が参加した。一部の連中は、伊香保温泉で盛大な前夜祭を行い、三日朝桐生駅で合流した。白髪のひとツルツルはげ天の男、コウモリ傘をステッキ代りに持ち、大儀そうに歩く。中学を卒業してから五十有余年の歳月は、人とりどりの変化を刻んでいるが、暫く話し合っておれば、みんな昔にかえって楽しい集いだ。うなぎどんぶりの中食をすませてから、先生のお宅に向う。

北村先生のお宅は駅から十四、五分、小山を背にした坂の途中にある。訪問時刻を予じめ伝えてあったので、われわれが坂を上ってゆくと、チャンチャンコを羽織った先生が、書斎の窓から、身を乗り出すようにして、手を振って歓迎してくださった。

北村先生は徳山中学、小浜中学の先生を勤めたのち、大正二年東北大学に入学し、数学の大家林鶴一教授に師事した。大正五年卒業と同時に静岡中学校に赴任、八年八月から十年三月まで上田中学校の教諭となった。廿会の生徒は大正十年卒業なので、先生に数学を教った。先生は「白寿草」という自叙伝に自ら言われているように「小柄で風彩が上らなかった」が黒板に描くマルや三角はすばらしく美しかった。また授業が終ると必らず黒板をきれいにふき消すなど、き帳面で教え方に何となく魅力があった。クラスの中にはあだ名をつける名人がいて、口をモグモグされるので「金魚」というあだなをつけたが、今ではそれもなつかしく、笑い話のようになって先生を慕っている。

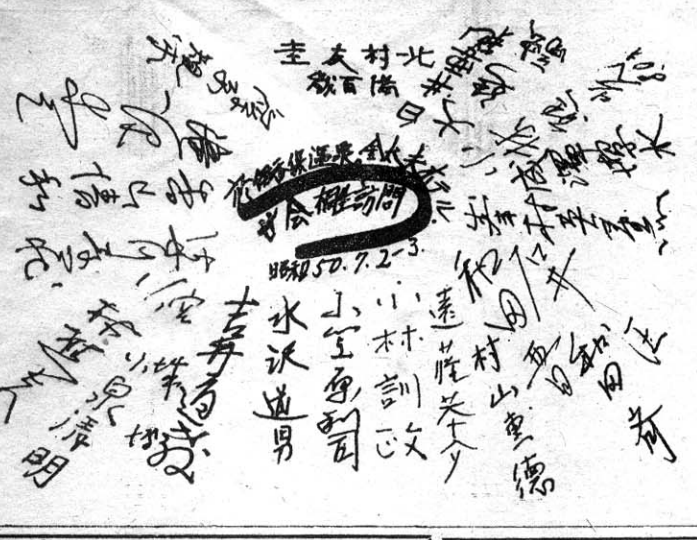
先生は上中から桐生高工の教官になり、戦後は群馬大工専講師にもなられた。冒頭に記したように先生は今年百才になられたが、今なお健康で、記憶力もすばらしくわれわれが自己紹介をすると、学校時代のエピソードや、今ここに住んでいるかなど、一々適切な応待をされたのには一同驚いた。

「眠れぬ時、ベッドでむづかしい数学の解き方を考えるのは楽しみだ」ともいわれた。「自分の所信に基づいて上司によく直言した」とも述懐された。先生は坐右の銘として、

日出即働、接人以和、菜食保身
念仏心安

をよく守っておられるので、今日の長寿を完うされたのだと思う。

二時間ほど先生のお宅にお邪魔して、一同は辞去したが、「先生のお年までには、われわれはまだ三十年近くある。お互いに健康に留意して、社会のために働こうではないか」と、はげまし合ったことである。北村先生は実にわれわれの誇りである。



小料理
味川
（36期の巣）
東京都港区新橋3－17－2
中条ビル2階
（新橋駅烏森口から徒歩1分）
電話 436－6563

鋳造品の総合商社（木型、金型より一貫生産）
矢島鋳工株式会社
普通鋳物　ダクタイル　砲金　機械加工
鋳鋼　ステンレス　シンチュウ　製缶加工
マリアブル　アルミ　ダイキャスト　組立、塗装
美術工芸鋳物　記念品、御贈答に、各種社内に陳列
川口市並木2－11－20　TEL（0482）53－2662（代）
取締役社長 矢島五郎（31期）　専務取締役 林嘉市（58期）
顧問弁護士 岩井重一（62期）

原嶋貴石株式会社
取締役社長 原嶋佐吉
本社 東京都新宿区三栄町7番地（原嶋ビル）
電話（357）8861（代）～1
（359）3414（夜間専用）
工場 東京都東村山市秋津町2-1184
大阪支店 大阪市南区鰻谷仲之町26（東心斉橋ビル）
新宿・京王百貨店　柏・高島屋
上野・京成百貨店　玉川・高島屋
大宮・高島屋　池袋・西武百貨店
東京・高島屋　渋谷・西武百貨店
横浜・高島屋

同期会の集い

古稀近い〝同期の桜〟

24期 32人が田沢温泉に

上中二十四期生の、上田高同窓会創立五十周年を記念する同級会は、去る六月七日、上田市郊外の田沢温泉常土屋ホテルで開いた。

去年、箱根小涌園での同級会で「来年は郷里で開きたい」との要望もあり、級友名簿ができたのを機に催したわけ。

この日、顔を見せた古稀近き同期の桜は、三十二名に達し、なかなか盛会だった。

東京、蒲郡、安曇野から

わけても、新村君が蒲郡市から卒業以来五十年ぶりに初参加したのをはじめ、小林君が半身不自由な病軀をおして安曇野から、東京側も、映画の「お花さん」主演女優文枝さんの実父樫山君を筆頭に六名が勇躍はせ参じ、楽しいクラス会に花をそえた。

記念撮影をすませて宴会場に移り、まず物故者へ黙祷したあと、斉藤君が同窓会祝賀式の模様を報告、続いて級友名簿を編集した箱山君に対し拍手で、その労苦をねぎらった。

さらに、笠原君が上田高校舎建設促進について要請。

また、当日不参加の土屋、前島両君の祝電披露や、八木君の短冊十枚寄贈が行なわれ、新村君の音頭で乾杯、宴に入った。

宴なかばで、大沢君が恩師小泉清見先生と、信州男児の歌を作詞した田中常憲氏との交遊関係について調査結果を発表。同君は上中当時弁論部員だけに、老いたりといえ、話しぶりに、そのけりんをのぞかせた。

なお、級友名簿の内容は、三十二頁の小冊子だが、巻頭を上田高校歌でかざり、級友の氏名、住所現況、略歴、体調、趣味など八項目を記載、物故者名もおさめてある。

翌日はホテルの好意によるマイクロバスで送られ、上田駅前で解散した。

出席者の氏名

石川秀敏、岡田良夫、大野信己、大沢幸三郎、笠原明義、樫山欽四郎、笠原正己、掛川彦次郎、小長谷清、小林忠義、小林喜澄、小平守、斎藤佐五兵衛、清水進、新村一夫、滝沢中、田中銑一、玉井帶刀、南条泰三、櫨話六郎、宮下哲之助、宮原平一、森晃、八木博、山浦義幹、柳沢信義、山岸虎雄、山岸孝、箱山貴太郎、依田赳夫、松山篤、猪飼源太郎。

（24期・猪飼源太郎記）

半世紀の空白なし

26期・来年は上山田で

東京地区に居住する26期の同級会を、残暑のきつい九月十九日、東京農林年金会館で開催した。昭和二年卒業は来年足かけ五十年になる。

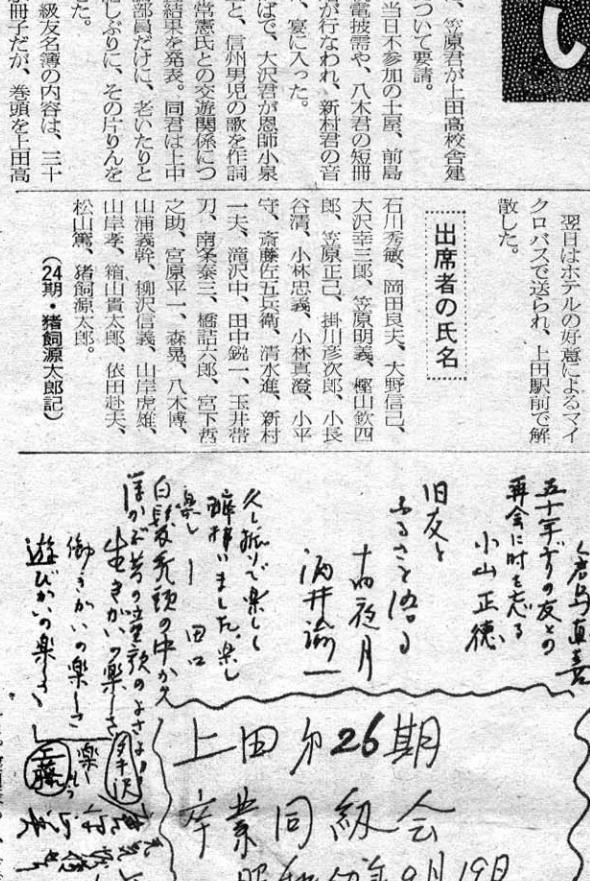
桜の咲く四月二十六日、上山田で盛大に集まろうという計画が進んでいるが、東京勢もそんな気運をもりあげようとしてか、出席率が異常にいい。

中には卒業以来この会には初めてという珍客（?）も三名。それに信前からわざわざ出席してくれたアクチブ（?）二名。

半世紀の間、一度も会うこともなかった空白が、跡もなく埋まって、上田の年少の日に帰る不思議さ。懐旧談あり、今後の生活設計あり、トシを忘れ、若やいだ回春の一夕であった。（幹事記）

出席者の氏名

石井公男、石井一美、上田政男、唐沢正美、工藤二三、倉島直喜、小山正徳、酒井諭一、田口喜一郎、高野貞、滝沢清、滝沢伝、長尾秀次、馬場武、宮崎久登、松井仁夫、村瀬正雄



今年は〝女性上位〟

35期 染谷と合同の集い

秋雨降る静かなり、去年お目にかかった方々のお顔を思い浮かべながら会場へと急ぐ。

第二回合同クラス会が十月二十四日二時半「みずほ」にて開催された。

会はおなじなりになられた方々へ黙とうをささげて始まる。元気に参加できた事を有難く思う。夜の会でどうしても御出席できない方もあって残念です。

中学、女学校を卒業して四十年経ったとは思えない若々しく楽しそうな彼等、彼の女達。今回は中学の先輩の矢島様が御出席になられて一層賑やかになる。

不況だ物価高だと追っかけられる様な日に、こんな時のクラス会は心が暖く和らぐ。時間のたつのも早く「信濃の国」「校歌」等を歌い、ふる里を思い、青春をなつかしみ、閉会となる。今年の良い思い出の一つとなった。

同校幹事様　会場の選定その他大変御苦労様でございました。厚く御礼申上げます。

高女（34）　角田哲子

追記　去年は男性の出席者の方が女性側より僅かながらも多かったが、本年は何故かそれが逆転した。「染谷のおんなしょ」が十名に対して「士手島」は七名、そこで矢島先輩（同期の矢島安雄君の兄貴であり、関東支部の副支部長でもある）を招待して、一応バランスを保ったのであるから、次回は二つ男性側の奮起を促す次第。しかし今回は思わぬ収穫もあったそれはたまたま同期の川合久子君が出張で長野から上京して来ており、山崎行則君と連絡がついて、同君の案内で飛入りで参加した事である。ただ残念な事にその日のうちに帰らねばならないので、幹事と一部都合のつく者が定刻より一時間早く集まり、女性側が天だ来ぬうちに一杯やりだした。

楽しそうな面々！▼（35期合同々期会）

人数はほんの数名ではあるが、卒業以来始めての者もあり、故郷の近況も語られて、短時間ではあったが有意義であった。フィナーレは矢島先輩のリードで一同立上って手をつないで輪をつくる。童謡「おててつないで……」を歌って解散と相なった次第。五十有歳のおばさん、おじさん連がこういう事をするのも同級会ならではのこと。なお当日の出席者は左の通り。

高女側（順不同）

若林計早美、小坂節子、森澄江、井伊てる、土屋十里、諏訪部のぶい、広川功、大場五子、角田哲子、佐々木文江

中学側

大井卓雄、佐藤義伸、石倉謙一、城田賢、山崎行則、出浦甚一、花岡猛。来賓＝矢島五郎

依田・宮坂先生囲み

昭六会員 上山田に35人

六月七日（土）昭六会の懇親会を開くに当り、会長、永井大二君の発案により、母校の総会に敬意を表し、同じ日に開催した。

先ず、一同勢揃いして、上田高校同窓会館に集い、母校同窓会50周年大会に参加、同上記念パーテーに出席、ビールで乾杯ということになり、一杯グット呑んだら「昭六会員」は第二会場上山田温泉へ向けて出発のため集合！だと。折角払った会費の半分も呑まないのにと、無念の思いを残して出発する。

大体、総会とか決算承認なんてものはつまらないものだが、ご多聞にもれずだったが、在校生諸君の若さ溢れる「グリークラブ」の合唱、吹奏楽演奏で「校歌、寮歌凱歌、クラシック、ポピュラー」等の演奏があったので、グンと点数が上ったと思うのは筆者のひが目かな？

さて、第二会場志なのやホテルの「昭六会」の方は素晴しかった。点をつければ二〇点かなへへへ……。

恩師依田、宮坂両先生を囲み、集う若人（ウソツケ）36名。両先生のあいさつ、近況報告では、多田市議当選の弁、初参加者（四名）の言訳？物故会員の追悼その他等々。

いよいよ、待望の「懇親会」つもる思い出話や昔の失敗談等々、オメー、ワレのドテガラスの気分に浸って来た頃は宴たけなわ。それ呑め、歌え、踊れ、騒げ！校歌寮歌、黒田節、下手クソ節……温泉一の美人芸妓が四人もはべっているのに、あまりの熱気に押されタジタジの感は気の毒の至り。

かくて夜の更けるも忘れたかの如くであったが、一先ず散会。だが一たん燃え上った炎はどうにもならぬ。二次会に繰出す者、室で呑み直す者、囲碁、マージャン？？？　翌朝、昨夜の余韻を偲びながらの楽しい朝食会の後、また会う日を約して現地解散した。

ちなみに、当日出席予定の尾台君が都合により欠席、惜しくも皆勤の記録を破らざるを得なかったのは残念だった。

出席者の氏名

依田先生、宮坂先生、小宮山敏夫、宮原栄吉、飯島守夫、小林一義、佐藤茂、朝倉保平、針塚正樹、中村直介、波田野宗利、奥山寿人、工藤芳夫、滝沢信、横山忠夫、峯村文人、今井荘司、原相模、丸山貞男、宮尾行雄、成沢省三、宮沢嘉男、召田忠雄、原元志、増沢知義、市原文雄、小林政家、斉藤恒雄、桑沢俊雄、赤羽義隆、多田忠正、細田公紀、塚田今朝則、青木固、永井大二、大井巌、曲尾清。

（30期・曲尾清記）

郷土の味を贈りましょう
信州味噌
極醸
山吹
信州味噌株式会社
本社／東京都新宿区下落合1―523
工場／長野県小諸市甲2905

小さな店です
店の小さい事は恥しいとは思いません
誠実、思いやりの少い事は恥かしい事だと思います
酒類・煙草・食料品・調味品
銘柄も品数も少いかも知れませんが
あたゝかい人間味で溢れさせたいのです
ビールは一つの銘柄
アサヒビールに情熱のすべてを傾けたいのです
大変な事です　大変な事だからやりたいのです
思う事はたやすい事です
行う事は難しい事です
はげまし、叱り、そして後押しをたのみます
〒160 東京都新宿区四谷二の九 田中ビル
山吹みそ／アサヒビール 専売店
株式会社 信州屋
TEL 三五七～五〇一五
三十六期 伊藤東四次郎

○高級婦人セーター製造卸
○代表取締役（54）馬場武彦
○社員募集
●高級ニットウェアー
株式会社 エバロン
●本社・営業所／〒106東京都港区西麻布4丁目11番7-102号　電03-407 5007
●工場／〒386 長野県上田市上塩尻26 電0268―22―1624

53期生が全国大会

卒業以来、満20年を迎え

在郷、関東、関西一堂に

上田高校、当時の上田松尾を巣立って満二十年の歳月が過ぎた。

これを機会に旧交を温めたいという機運が関東、在郷双方より起こったが、このたび、在郷勢の尽力により、十月四日（土）午後三時に、初の五十三期大会を開催することができた。

全国から77人の大盛況

当日会場となった上田市大門町の"ささや"（米津福一君経営）には、地元を中心に関東をはじめ、全国より七十七名の同期の桜が集まり、恩師七名をお迎えして大盛会となった。

会場受付には、地元哲朗会（同志十三名）寄贈の祝かぶりが置かれ、ぞくぞく集う同期生は、升を片手になつかしい友の顔に、笑いのうずができあがった。

まず、美女の奏でるエレクトーンによる母校の歌々をバックに、久保田泰雄君（SBCアナ）の軽妙な司会により、地元を代表して瀬下司君が見事な開会のあいさつを行い、喝采を博した。また、鬼簡に入られた恩師、並びに同期五名の霊に一分間の黙祷を捧げたあと、宴に入った。

学窓を離れて、はや二十年とあって「半数の顔は判らない」とか「確かに見覚えがあるな?!」などの声もあちこちに聞こえ、過ぎし二昔の歳月の長さに感慨もひとしおであった。

恩師の珍芸に大喜び

"おでん"や"生そば""寿司""コーナーはもとより、色添え（ホステス十数名・五十三期出席の紅一点の原田尚子女史）もあるという豪華さに加え、恩師の珍芸（高柳先生の踊り、荒木先生の松尾数え唄等）や、クラスメートがスクラムを組んで歌うなど三時間もの時が矢のように過ぎていった。

最後に参加全員のカンパによって、心ばかりのものを母校に寄附を贈った。

二年ごとに開催を決議

尚同期会は今後、二年毎に開催することを全員一致にて決議し、二年後の再会を約し、上田青年会議所会頭を務める甲田裕茂君の音頭により、萬歳を三唱して別れを惜みつつ散会した。その後各クラス単位に二次会の席も設けられて三々五々会場"ささや"を後にした。

本会は目出たく盛大裡に終了したものの、その夜の袋町界隈は夜半を過ぎるまで、五十三期生の街であったと地元は伝えている。

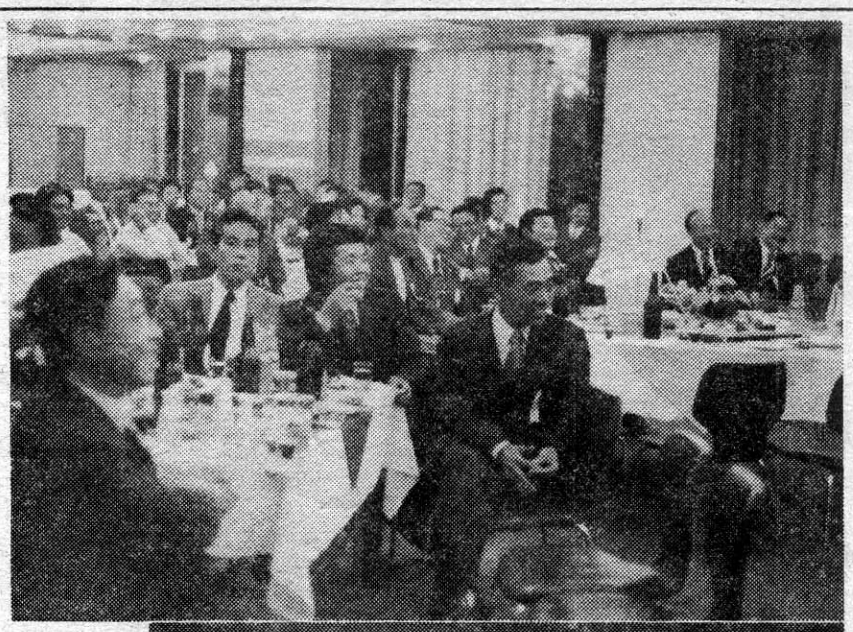


写真 (上)笑顔…笑顔のパーティー風景。名前は思い出せるかな (中)壇上でスクラム組んで歌う同期の桜 (下)一夜明けて、軽井沢での雨中のゴルフコンペ

十二回目でも……

やっぱり現われる新顔

翌日は有志とのゴルフ

夢の如き一夜も明け、さて翌日は有志十名によるゴルフコンペを軽井沢72GCにて開催した。

前日の好天気は一変し台風による雨中の大熱戦を展開したが、大阪より参加した中沢哲君が好スコアーをマークし優勝とベスト・グロスに輝き、第一回のチャンピオンカップを獲得した。二位瀬沢武君、三位瀬下司君。

今回の会の成功について、郷里実業界で活躍中の諸君や、事務局幹事の司会で、閉会が宣せられ、同君から、一般経過報告と、欠席会員の近況が報告された。

報告の中で、九月十八日に、本田徹君が永眠されたことは悲しく一同、心から冥福を祈って合掌した次第。

健康で楽しい会合を

今後、会員の増加はあり得ないのだから、お互いに、健康に留意し、いつまでも、この楽しい会合に出席することを誓いあった。

また、母校のPTA会長である柳沢（理）幹事から、母校の本建築が、近々に始まることになっており、われわれが学んだ、木造校舎は消え去るので、一度、見納めとして、学校を訪問してほしい、と母校の近況報告があった。

ガヤガヤ賑やかな宴たけなわの中で、東京側から、来年の三三会は、松茸狩りか、リンゴ狩りなどの趣向を盛りこんでほしいと、提案があり、この線で計画することとなった。

来年は大半が還暦

大半の者が、来年は還暦を迎える年代であるので、記念写真をとりたい、という別の提案も出された。

歓談はいつまでも尽きないが、予定時刻を過ぎたので、校歌、寮歌、応援歌の合唱、万才の三唱を終えて散会した頃は、夕闇が、太郎山を静かに包んでいた。

出席者の氏名

甘利利男、石井益一、石川賢一、石坂律夫、井出実、押鐘隆興、太田速雄、金沢継人、河合実、清水金次郎、下村正吾、白木正典、武井一寿、土屋敦慶、中曽根武彦、中村辰男、平林康治、杉井修、松尾忠良、丸山一也、柳沢理一郎、矢島豪、横沢理、依田勝（以上地元）

荒井和夫、飯塚俊男、五十嵐八郎、椎塚三夫、比留間金雄、弘世弘信、保科巌（以上在京者）

北沢茂樹（滋賀県）

（33期・弘世弘信記）

松尾城下の思出しのび

21期大士会の集い

立冬、そして師走。

何という日まぐるしさだ。

時間が加速度にどんどん消え去って行くような気がする。

きょうは、ひねもす木枯が、吹きすさんだ。銀杏の落葉が街頭の片隅に吹き寄せられて、自然の非情をかこっている。

次は正月だ。

縁起のよくない話が、われわれ高齢者にとって、正月は、何を意味するのだろう。

何とか、冥土の一里塚なんていういやな言葉がある。

希望、新鮮さと、いうよりも、現実的な時間の、冷酷、きびしい移行が先ず頭に来る。

それ等を払拭して、頭を急角度に回転させるということは老人の冒険でさえある。

しかし、こんな感傷は思い切って一掃だ。一つの勇猛心。

精一杯生き抜くということ、それは老人にとって残されたただ一つの路だ。

少くとも、私はそう思う。

来年もまた集まろう

今宵の大士会で痛飲しながら、願わくは来年もこの顔ぶれで、いや、もっと多くの両々の老いを忘た顔を見たいものだ。

末世の奥いのする今の世代に、老人の役割は必らずある筈だ。

老いぼれのタワゴトとそしらばそれ。

この集い。この痛飲の空気を。忘れずに明日も頑張ろう。

昭和五十年十一月十日午後六時。

出席者の氏名

関東支部よりの今回の参加者＝高木快雄、堀内忠久、清水公寛、井沢保、大塚教雄、吉村晴夫、小山重満、加藤孝、潤賀康成、武井淳、小林芝興、岩田久、伊藤肇、宮崎佑輔、居沢正毅、桜井功輝、山田武彦、甲田育也、宮川滝男、菊地功、堀内正智、須田武久。

恩師＝荒木豊治先生、掛川理三郎先生、倉沢任彦先生、高橋厚先生、山極真平先生、竹内敬太郎先生、岩下美千穂先生（順不同）

（53期・須田武久、堀内正智記）

出席者の氏名

小林之伸、芦田中、鴨田次郎、小山礼吉、若林幸三、小泉菱岳、小日向孝二、半田祐一、関光雄（順不同）。

立冬や蜘蛛の上に蜘蛛蒼る

立冬に炬燵購い生ず一旬

山茶花のはしり見られて、立冬の

弱き日ざしをわれ独り行く

（21期・関光雄記）

九段、東電千代田班で大士会十名の同志は飲み、かつ語った。

走馬灯のように、松尾城下の幾多の思出が明滅する。

山紫に、水明らかな信州。

ここで、育くまれた夢想に近い願望を、忘れることはできない。

初恋の彼女の顔……等々。

齢い七十。一夕、痛飲する幸せ。

居並ぶ友達の顔を、私は何度も見直した。これ等の集いに幸せあるよう、私は深く祈願する。

土木建設機械
基礎工事用機械
アースドリル、ベント工事

日立建機特販店

B
東京ブルトーザKK
（東ブル）
本社　東京都港区芝公園1－2－16
TEF431－7481(代)
支店　大阪・福岡

ビル総合管理
清掃、警備
空調及電気
ビル改装営繕工事

TKK 土屋工業KK
東京都港区西久保広町29
TEL 432－4724(代)

取締役社長　土屋二三男（33回）
（上田市海野町出身）

美ヶ原の高原と依田川の清流と丸鉄の電車—
これは私達を育んで呉れた文字通りの故里で
ありしばし懐しい少年期を連想させて呉れる

在京啓明会

上田高校（旧中学）、染ヶ谷丘高校（旧高女）
卒業生で依田窪出身者の集い

会長	土屋　学	（上中31回生）	TEL	(723) 1717
副会長	野間　朋子	（上田高女28回生）	〃	(311) 1568
常任幹事	小林　郷司	（上中40回生）	〃	(920) 6736
幹事	上野　敏雄	（〃 43 〃）	〃	(715) 6624
〃	清水　義幸	（上高56 〃）	〃	0425(91) 0187
〃	小山　福子	（染谷丘45 〃）	〃	(827) 5413
〃	早川　信子	（〃 50 〃）	〃	(370) 8608

三十七期の諸兄!! お読み下さい

（36）伊藤東四次郎

少年の頃の一時期、私は信州の上田で育った。父は地震で有名な松代、母は伝説で知られる姥捨山近くの出であり、生粋の信州人である。したがって、東京生まれとはいえ、私も信州人である事は確かである。

私が空母「信濃」という軍艦のことや、その悲劇的な生涯について、実際に耳にしたのは、満州から復員した昭和二十一年の春頃だった。「信濃」という艦名を知ったとき、私はこの軍艦に奇妙なほどの人間臭さと同郷人に対する親近感に似たものを、覚えたのを、いまも記憶している。

それ以来、私はいつの日にか「信濃」を主人公にした小説を書いてみたい、とおもうようになった。

私が「信濃」の薄幸の運命に涙し、絶ちがたい愛惜の情をいだいたのは、作家としてのセンシビリティーではなく、信州人としての私の血が騒いだからでもある。

この文章は、まぼろしの空母「信濃」の著者「相良俊輔」こと関義祐氏の後書きの書き出しである。

「心と血とことばにつながるふるさと信州」相良俊輔氏との出合いは正にこれであります。うちの近所に「信濃路の春乃家」なる店がありまして、酒と人生の好きな人が集って来ます。両親が東部町出身で、御本人は東京生まれの関導一氏（文化放送出版部）が信濃路という言葉に引かれて、春乃家に出没しているうちに、いつしか、私は友達になりました。この関さんがある夜、長髪、やせぎすで、眼光するどく、一見作家と思われる方を、おつれして、春乃家で飲んでいる処へ、私がいい機嫌で入って行きました。

「ああ、信州屋が来た。どうぞこちらへ」と関さんにうながされて同席しました。

「貴方は信州のどちらですか」と相良俊輔氏が聞きました。「わしは上田です」とこたえたところ「なつかしい事をいうね、わたしは上田の中学に三年までおりました」

話しているうちに、私の一年後輩だという事が分ったので、私の知っている名前を少しばかりあげてみた処、一寸思いあたる人がなく首をかしげておりました。

彼は失われた遠い少年の頃を追憶している風だったが、突然「東千山の険により、西方獄の雲によじ」と「信州男子」を歌い出しました。私も合唱するけれど、五年迄いた小生の方が不確かで、三年迄しか居なかった彼の方がずっと正確に歌うので、私はびっくりしました。三年で上田中学を去っている彼は何か重大な忘れ物か欠落があって、それをみつけるか、今につなぎとめたいとしきりに思いあぐねている風でありました。

私は相良さんと上田中学三年まで同じ級だった友達を見つけ出しますと約束して別れました。久しぶりに「心と血とことばにつながるふるさと信州」という言葉を、たのしく思い出し、あったかい気持になりました。

三十七期の諸兄!!

相良俊輔氏とと関義祐氏と三年迄同じ級だった人、隣近所で仲好くしていた方がありましたら私、信州屋、〔三五七―五〇一五〕へ御電話下さい。どうぞ御協力願います。

三十六期　伊藤東四次郎

此の出稿を信州屋の地下の「アルバトロス」で、「まぼろしの空母信濃」の本を持ち込んで書いていたら、「アルバトロス」で働いている「とも子」という可愛い女性が、

「あら、なつかし本ですね、相良俊輔先生のですよ」というので「どうして貴女が知っているの？」とたずねました。

「私講談社の学二につとめておりまして、此の本は学二扱いで、相良先生に何度もお茶を入れてあげた事がございます」などといわれて、びっくりしました。人の縁のつながりの不思議さに、ただ驚くばかりです。

大型新人編集者登場

（60）小林秀芳

このたび、まことにケシカラン後輩を一人つかまえました。とりあえず会報編集の雑務を手伝わせることにいたしましたが、まずは本人に自己紹介させますのでよろしく。なお右タイトルは、本人をおだてて使うための方便でありまず、念のため。編集部。

そうです、卒業以来、同窓会にも、関東支部にも全く顔を出さずに、東京という大海原をあっちに飛びこっちに飛びしておりました一羽のハグレ鳥であります。

ところが「上中カイカイ、粗にして洩さず」、このハグレ鳥めがかの懐しき太郎山の麓を巣立って以来、十二年ぶりに六文銭の旗印を目にいたしました。

〝わんだれ〟という言葉を耳にいたしました。

恐ろしき松尾の先輩たちの前に立ちました。

さる先輩の前に迷に出た迷論に襟首を押えられてしまったわけであります。

「十二年間、母校や先輩たちに対して不義理の限りを尽してきたのだから、会報の編集を手伝え」

60期、つまり昭和四十三年卒の小柿秀芳という不肖の後輩ですが右のような事情で、会報編集の仕事をお伝いすることになりましたので、以後よろしくお見知りおきを（とりあえずは〝シメキリ〟という言葉を武器に、先輩たちをつつくことから始めようと愉しみにしております。）

おけら火

―暮の京都散策―

（40）小林郷司

「おけら火に、明るく、京の卯年かな」

私は仕事の性格上、年中心の休まる暇がないが、正月前後と夏休みはつとめて家族と行を共にするように心掛けているが、またそれが私の生活の張りでもあり、心の支えになっている。

併しながら、飛行機嫌いの私は海外旅行は不可能なので、暮から正月にかけては関西へ、夏休みは信州へ出掛けるのを恒例としている。

昨年も暮の三十日から京都、伊勢、大阪へ行って来た。暮の京都は正月を迎える準備に余念がないので何とはなしに慌しいが、それでも訪れる人も比較的少いので、京都らしい落着いた冬の日を過すことが出来た。

大原の三千院の手前の料理屋で名物の湯豆腐を中食にいただいたが、底冷えしている身体には、温かい湯気が恋しく思われて、胃の腑に入る熱い豆腐も、一入美味しく感じられた。

三千院の本堂をめぐる上の庭園は、弱い冬の湯ざしを受けながら周りの池や泉と吾が見事に調和して、しっとりとした雰囲気を漂わしていた。

一面苔の生えている平庭の本堂から極楽院の間に渡して敷いてある板の簀の子の冷たい感触が、靴下を通して直に身体に伝わって来たが、その時ふっと京女の冷たさ思い知らされた夜を思い出した。

その時は京都の春は酣で、円山公園の夜桜が雷光にくっきりと映し出されて、一きわ見事な情景を呈している晩であった。

祇園の茶屋の一室で仲間と飲んでいた私は見馴れない舞妓に気がついた。傍のお妓さんに聞くとその舞妓は座敷へ出て二日目という。何とはなしに落つかず、馴れない手付きや作法で一生懸命客の気を損じないように努めている様子が、ありありと洞る態度である。

十七、八の器量は十人並の子であったが、余りの初々しさに一同で御祝儀を弾むことにしたが、御祝儀を渡そうとした私の手から、横のお妓さんがさっと奪いとって「この子の面倒は私が見ていますから私が預ります」とその祝儀袋を自分の胸に手挟んだ。

祝儀といっても二千円前後であったと思うが、関東流に考えれば舞妓のあん蜜代位にという軽い気持であったが、それを客の思惑を無視して横奪りした妓さんに興醒めした思いを抱くと共に、常に脅かされて来た京都の歴史と風土を改めて思い知らされて、京女の一面をうがゞい知った春の宵であった。

三千院を出てタクシーで暫く戻り、右折して寂光院へ行った。

陽ざしが時折さしこんでは又雲に遮ぎられ、冷たい風が吹き抜けて、思わず肩を丸める師走の大原である。

漸く辿りついたところ、お社へ上る石段の手前の門が閉されて、暮の大掃除につき今日の拝観は出来ないとの張り紙に、致し方なく踵を返してホテルに向った。

大原からの帰途、京都市内へ入る手前、左へ曲って曼殊院へ行った。

入口は田舎の社の庫裡と変らない黒く煤汚れた暗い台所であった。

拝観人は八割方が若い女性で、還州好みの枯山水に面した縁側には十数人の男女が思い思いの格好で静かに眺めている姿が印象的であった。

この曼殊院は書院建築の代表的なものと知られ、小書院の黄昏の間における探幽筆の襖と寄せ木で作られた違い棚に格別興味をそそられたが、私の心を捉えて放さないものは前述の庭園であった。

滝石から白砂の水が流れ出て、水分石から拡がり、その拡がりの中に二つの島、即ち鶴島と亀島とを心憎いばかりの手法で配置してあって、水にまがう箒目も美しい白砂を眺めていると、その自然に融け込んだ人工の妙は、現代を超越して平安朝時代の牛車の軋の音が聞えてくるような錯覚に陥りそうになる。

この庭に黙して座っていると飽きない。それ程私の心を魅するものは何であらうか。再び訪れる日を心に期して門跡寺を後にした。

大晦日の夜、紅白歌合戦もそこそこに、ホテルの部屋を後にして八坂神社へ向う。

入口の朱塗の楼門は、夜空に明るく照らされて、その下を何百となくおけら火の灯がくるくると輪を画き乍ら、石段を降りてくる。

おけら火は大晦日の深夜、竹の火縄に八坂の社の火を移して正月のかまどの火とすれば、その一年は安泰であるとの故事によるが、八坂神社を祇園さんと呼び親しむ京都人には産土神と考えているのであろう。

テレビではないが、祇園さんへお詣りして、おけら火をくるくる廻すと「行く年、来る年」を実感として肌に感ずる。

お蔭様で今年は無事であった。来年も家中健康で倖せに暮せますようにと、神仏に祈るその願いは人生のもう一つのけじめの中にこそ深まるものであろう。

近くの知恩院の除夜の鐘が聞えて来た。空を仰ぐと星が見える。明日の元旦はお天気も保らそうである。

編集室雑感

何んということなしに編集委員とやらになって会議があると、枯木も山の賑いという気持ちでノコノコと出掛け皆さんの足手まといになっています。時にはチンプンカンプンで、ただ傍観を余儀なくしているが広告を含めて編集から印刷、発行迄の一連の仕事は全く大変な労力なのです。トウシローの片手間では手に負えるものではありません。幸い矢島副支部長はじめ花岡編集長、石倉謙一、清水幾男、槻沢健、村田寛君等一騎当千のベテラン委員の熱心な努力の結晶といわなければなりません。特に最後の割り付けともなると徹夜に及ぶことがしばしばです。

集ってくる原稿でも用紙が種々雑多、一つ、一つ字及行数を計算して会報の字数に当てはめ、種類別に頁の配分を決めるのですが殊に便箋などで投稿されるものは全部書き直しです。文選屋のおあにいさんにも能率が落ちるとおどかされない様、それは校正の仕事がスムーズに進渉する為でもあるのです。

一例をあげると従来のものでは馬場友義（13）大先輩の郷土歴史の原稿は編集委員泣せの記事でした。達筆すぎて誠に難解、その上考古学的なものがからんでいるだけ誰れでもというわけにはいきません専らその任に当っていたのが清水義幸君、毎度苦労していました。

さて会報十二号に掲載した橋本利政（33）のゴルフの記事について同期の飯島力夫氏よりこの種のものを同窓会報という性格のものに掲載するのはいささか疑義があり同窓会報は原点にかえれとの御意見が出て編集委員として有難く頂戴いたしました。実はこの記事は当時、私の担当頁に組入れられる原稿でした。私を含め各委員とも無定見、無原則で掲載したわけではないのです。会報発足以来の論議をかもした原稿の一つでした。最後に、ただゴルフ上達の指導法ならば市井にはん濫している雑誌等を読めばこと足りるでしょう、然し初心者のためという基本を教えているものであればシングルの士でも、もう一度基本を思い出すことも毒にはならないだろうし絵まで添えての橋本氏の労作に敬意を表したのが一つ、もう一つには同窓生諸兄の会員に対する関心を計るなどという大それた考えはありませんでしたが当然、この記事を掲載すれば必ずや諸兄から何らかの反応があるだろう、若しも何んの反応もないならば会部ではないとしても多くの同窓諸兄の会報に対する無関心さを現わすバロメーターとなり会報発行そのものの原点にかえって考え直さなければならない重要な意味を示唆していると考えられたからです。幸いこの記事に直接関係はなかったのですが、天田先輩からまた飯島兄からの御意見を得たことは大変に参考になりました。

諸兄、最近の会報をお読みになってお気付の点がありませんか。それはいつも同じ執筆者が目につきませんか。これは投稿者の少い事を端的に現わしているのです。これがマンネリ化を招き又、余り同窓会報という枠に拘束されすぎると世間一般の会報となり読まなくとも判っているよと屑籠へ直行ということにもなりかねないわけです。事実そうしたお叱りだけの投書も時折あるそうです。原稿の少いときなどは委員に埋め原稿を割りふられたり発行期日に間に合せる為花岡編集長などは電話で原稿をとるなどまるで一流新聞社なみの綱渡りの心労をしていることも間々あるのです。私達は広告、編集委員に選ばれた以上その労をいとい惜しむものではありません。どうか同窓会に関係する記事は勿論、その他どんな内容のものでもよいではありませんか。読者の心にのこり、あるいは懐旧ともなるならば委員が悲鳴を上げる程ドシドシ投稿して下さい。会報は絶対に限られた者達の記事であってはならないのです。その為にも若い期の諸君の投稿を期待しています。そして吾が「うえだ」を全会員の熱意と努力でますます発展向上させようではありませんか。ヤクなし一編集委員のお願いと少しでも飯島兄へのお答えになったとすれば幸甚です。（32）中村礼三

原稿募集、広告募集 年会費納入について

原稿募集

一、内容　自由

一、原稿枚数　四百字詰原稿用紙三枚以内

一、締切日　昭和五十一年四月末日

一、原稿送先　〒三三二　川口市並木二の十一の二十　矢島鋳工㈱内上田高校同窓会、関東支部事務局宛」

広告募集

一、種類六千円　一万二千円

申込先「関東支部事務局」

◎会員の年会費の納入先

本会の会計事務は、未記会計において取扱っています。

◎年会費の納入方法について

（一）毎年春季（五月か六月）発行の会報を全会員に送るとき本会会計への払込票を同封し、その年の年会費をこの票によって、納入していただくことを原則とします。

（二）支部大会当日（毎年六月か七月）、その大会に御出席の方は、その会場の受付で、大会費とは別に年会費を納入される場合もある。

（三）または、各期にはそれぞれ同期生の会合が年に一回か二回開催されている期もありますので、その会合で幹事の方が本会の年会費未納者から預って、本会会計へ納めて下さる、という方法がとられてもいます。

いずれに致しましても、年会費の納入に御協力下さい。

（年会費は一、〇〇〇円です）

本会会計は（47）牧内操氏が会計の代表者となっています。

会計の取扱場所及び振替口座は、次の如く設定されています。

埼玉県川口市青木町二ノ二ノ七　牧内会計事務所上田高校同窓会

・関東支部

振替口座　長野一八一三二

福寿司

渋谷区宇田川町35―7
TEL 461―8261
広尾店TEL473―0236

32期の中村礼三です。こは32期会主人で古いオヤジです。ご友人席は本人で。お願いさ近ば尋ね位迄のクラス場だあって。せいぜ た。ヨロシク。

ベルマークを集めて
学校の設備を
整えよう
1200万世帯の人が
運動に参加しています

財団法人
教育設備助成会
専務理事　和田　斉（20期）

天ぷら、ふぐ、活魚
割烹　幸村（ゆきむら）
ふるさとの味です。御宴会、御商談、御家族連れに御利用下さい。
新宿区戸塚町2―99
TEL 03―200―0775
三井　明（51期）（上田市新田出身）

母校だより

母校文化祭から初秋の菅平高原へ

（33）飯塚茂男

昭和初年の頃は、上田から東京まで汽車で六時間もかかったものが、特急で二時間数十分で行ける今では、故郷は遠くに在りて憶う懐しさも幾分薄れてしまったかも知れないが、やはりまのあたりに幼少の頃育んでくれた故郷の山河に接する感慨は時代が経てば経つ程一入のものがあるのではないだろうか。

東京ではいまだ残暑酷しい初秋の九月六日、王陀礼会有志八人（矢島五郎先輩以下）は自動車二台に分乗、池袋西口を午前七時出発。十時過ぎ富岡の手前の神川村で小休止。地産のもぎたての梨を賞味。夜宴のための新鮮な茄子、ねぎ、みょうが等をごっそり仕入れる。旅は快調。

都塵や残暑も次第に忘れ去り、周囲ののどかな田園風景を満喫しつつ十二時前に碓氷峠の入口のドライブイン美里で昼食。一時過母校同窓会館前に到着。

（五、六、七日母校文化祭）

懐しい校門は昔の姿そのままながら、同窓会館前路上や校門前に群がる観客の中に女子学生の姿がいやに目につき、何か女子高校に来たのではないかと錯覚を起こす。

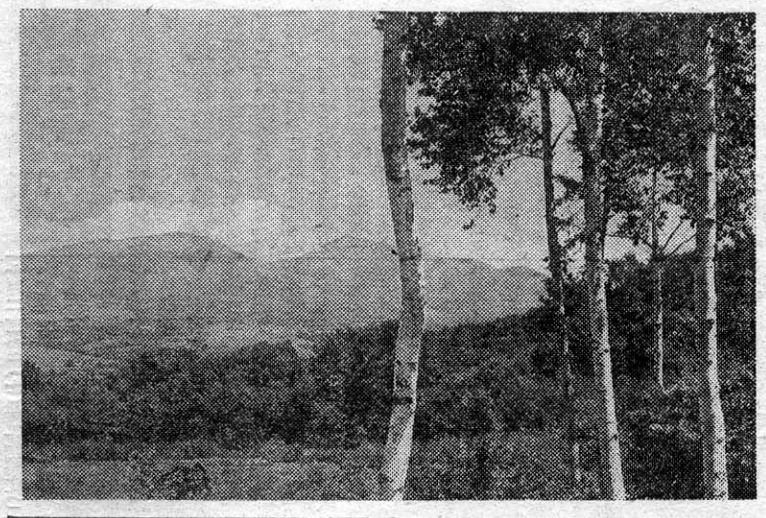
校長室で矢島先輩以下一行六人は柳沢校長・教頭先生・私と同期の矢島豪先生等にお会いする。

矢島先輩が支化祭招待の御挨拶を申述べると共に先生がたからいろいろ母校の現況等を聞く。

会談後支化祭会場を参観。後輩諸氏それぞれの苦心の作品や研究の成果をゆっくり見学できないのが残念でしたが、私の様に、昭和九年卒の老輩には老朽の極とも云うべき校舎の荒廃ぶりや暗さなどが懐しさとは裏腹にいたましい気持が交さくして何とも複雑微妙な思いで一杯でした。

この文化祭が新校舎で行われたら一層ひきたつのではないだろうか……。一行六人は一様に一日も早く新校舎が完成することを念じつつ母校を辞去。

角間温泉岩屋館で休憩入浴。角間渓谷の清澄清涼な大気が湯上がりの肌を心地よくなぶってくれる。腹一杯清気を吸いこむ。束の間ながら東京を離れてよかったと泌々参加させて貰った有難さを感じた。四時過ぎ宵の宿である菅平高原の山荘 矢風寮（矢島先輩所有）へ。



矢島先輩自慢の、手造りのすき焼。花岡・関・小市諸氏苦心の各種の野菜料理等々、文字通り舌鼓帯ながらテーブル狭しと並んだ料理の山は、みるみるうちに食欲旺盛な各自の胃袋に消えて行く。スポーツ談・政治談・教育談等々時の経つのも忘れる。

九時半頃柳沢健氏（47期）参加宴一段と盛り上る。文化祭にちなみ彼が招かれた上田市民会館での講演の模様等々歓談深更に及ぶ。

翌七日十時半矢風寮発。妻恋村で新鮮なレタスをみやげに共同購入長野原・川原湯を経て滝の白糸の滝茶亭で昼食。

高崎―熊谷―大宮を経て六時半過ぎ矢島先輩宅に無事到着。各自思い出を残しつつ解散。

こういう旅は金銭では買えない楽しくも、貴い思い出になると思う。

終りに矢島先輩始め終始自動車を運転して下さった花岡・石倉・小市氏等僚友に深謝しつつ筆をおく。（33・飯塚茨男記）50・9・7

参加者　矢島五郎（31期）
飯塚茨男（33〃）
花岡　僖（35〃）
石倉謙一（35〃）
関　邦雄（37〃）
小市則夫（54〃）

上田のジョナサン

流石、権威と伝統を誇る、『うえだ』であります。

只々、原稿が集まらなかった、このままでは穴があくという理由だけで、初日に早くも新入りに対して、「何か書け」という、かしこくも涙の出るほど嬉しいお言葉！

そこで、貴重な紙面をお借りして、私、小林は、懐しき60期の諸君、それも、ついこの間までの私同様、本部・支部を問わず、同窓会には一切ご無沙汰ものの限りを尽している諸君に申し上げます。（ちなみに60期という呼称は、この世界では、唯一無二の資格証明でありますから、以後銘記のほどを。といっても、おそらく貴君は、自分が、全体何期なのか見当もつかないこと と存じますので、目安を申し上げます。

◉全八組のうち、一組と二組に女子が集中した、不公平な年次であること。

◉少ないわりに、女子には発展屋が多かったこと、そしてその恩恵に浴した者は、意外にも一組と二組にはいなかったこと。

◉体操のジンゴさんが、一組を担当したこと。体操の先生には、この他、色メガネの、われわれが行けない処によく行っているという御仁がいたということ……。

◉六組は、国語のサンちゃんこと伊藤先生、四組は、数学の大規先生であったこと。以上で十二行前で始まった括弧を閉じます）

ええ、60期の諸君実に先輩とはアリガタイものですよ

たとえば、昨日の日曜日、私は東大と明治の試合に引っ張り出されました。そして、両チームを同時に応援させられました。明大には丸山、東大には渋沢という、両後輩がいるからでありますが、いずれにせよ、まことに忙しくも得がたい経験でした。（この様子では、後楽園にかり出されて、巨人と中日を両方応援させられるかもしれません）

かにかくも、先輩というものは、そして同窓会というものは、アリガタキものでありますから、諸君も世の中の愉しみを全部味わいつくしてからで結構ですから、ぜひご連絡を下さい。

いま何処？

（60）小林秀芳

ところで次の諸君は、いま世の中面白くて仕方のない連中、換言すれば、まず今後十年位は、絶対に本部にも支部にも顔を出す希望のない連中ですので、ここに近況をお知らせしておきます支部にガッチリ捕えられた私の心情故であります。どう、ご同情）

◉山崎裕二君（七組）　東京教育大を出て、現在横浜にて高校教師として活躍中。

◉久保柳哉君（三組）　慶大卒後、十何年間定職を持たず。税理士にはなったはず。

◉かくいうご本人は、編集屋として、蝸牛の歩みを続けております。所属は、㈱ASA。主に一冊？万円もする豪華本を手がけていますが、ヒマと○のあるむきは、ぜひ一度お遊びに…連絡先は、東京・七一一―九七三三。

「ずっこけ在校録」（3）

中村礼三（32）

可もなく不可はあったが、どうやら落第もせずに三年生になった。三年生になると全級の組替えがあってオレはA組になった。校長も「フォックス」こと佐々木兵四郎校長から春日賢一校長に替り、二年の担任だった倉沢剛先生は又、大学で勉強するとのことで退職された。

昭和五年春のことである。

「シメタ」今度こそ英語の教師から逃げられると期待したところが豈はからんや担任が発表されるとA組は丸山敏雄先生、ご存知英語のドント先生である。

一瞬、ワレと我が目を凝ったがこれぱっかりはどうしようもない。身の不運を嘆いたが今にしてつくづく考えるとドント先生三年の先任教師、自分の組から落第坊主を出しては己れの沾券にかかわると思われてかオレなんか大分おめこぼした頂戴した仲間の一人であったかも知れない。そうであれば誠に「ドント大明神」である。このドント先生と卒業するまでの三年間おつき合いを願うとは先生は勿論、オレも夢にも思わなかったヨ。

ドント先生との三年間はいろいろな事件があった。曰く。飲酒事件から奈良演談義、カンニング事件、運動会のビラまきから小畝啓介の退学騒ぎ等々、ドント先生心の休まる日もなったと推察される。こんな事件に全部オレが係りあってはいなかったが互いにトボケて先生を煙にまいて痛快を叫んでいたのだから仕末におえない。先生はオレ達が卒業した翌年転校され、その後故郷の新潟で「ガン」の為に亡くなられたと風の便りに聞いた。十年程前である。先生はいつも比較的小さな細い銀縁のメガネを稍々鼻先にズラせてかけ遠くを見るときは上目を使う顔の細い顔立ちでいうなればカマキリ型である。

怒っても大きい声を出さずクッとこらえるタイプの先生で、心底穏やかならぬときはスグ判るんだ。ミミズの様な青筋がこめかみに走るんだよ。これだけ書けば先生を悩ました奴や良い点貰った奴は想い出して、「ナムアミダブツ」の一つも唱えろヤ。

三年生までオレは柔道部に籍があって屋代中学へ試合に行ったことがある。貼り出された紙を見たらオレが一番最初だ。相手はオレより二まわりもデカイ奴で腕をつっぱって腰を引いてオレの未熟な業では投げられそうにもないので締め業でいってやろうと釣込足で寝業に引っぱり込んで、柔道袴の膝辺りを掴むと思ったら肉一杯で布を掴む余地がネエ程ふくれてやがんの、オレは一瞬、躊躇したがエイとばかりに肉と一緒に握ったら「イテテテ…」なんて泣き声を出したので思はず力をゆるめたらドタンとひっくり返えされて逃げられとうとう引分けに終ってしまった。このとき屋代中学の選手の数人に上衣の袖が、極めて細く袖口を握む余地のない又袴は職人の股引の如くパッチリ、これ又、握む余地のない試合衣を着ているものがあったヨ。

その時はいやに小さい柔道着をつけて出てきたナァ位に考えていたが、後で長野商業へ試合を見学に行ったとき長商の殆どの選手がこれを着用していたので悟るところがあった。つまり相手に有利な組手をさせない為に考え出した試合用の柔道衣であったんだよ。規則違反ではないのだろうがキタネエよナァ。吾が上田中学ではそんな恰好の悪い柔道衣を着る選手は一人もいなかったし皆んな正々堂々と業を競ったもんだヨ。

オレ達、三年生の仲間でも小山の運チャン、児玉浩という強いのがいたよ。

けど、この時代は五年生に青木周、大井厳という強い先輩がいてちょいちょい稽古をつけてもらった。大井先輩はオレと体格が似ていてズングリ型で得意業は体落し専門、得意が分っているから滅多に投げられなかったが、青木先輩には全く閉口したネ。背丈が二十糎も差があり得意業は内股なのか、跳腰なのか判らなかったが、先輩の足のウラがオレの内股のところにかかるんだ、それでピンと跳ね上げるんだからたまらない、股の付け根からホーテンにかけて痛烈な電気の様な痛みが走るんだとても堪えられるなんて筋合のものでないぜ。

ものの見事にブン投げられて直ぐ起き上がれない位強烈な業だったネ。この先輩だけはオレにとって全くの鬼門だった。先輩にチョット来いなんて呼ばれるとソッとしたよ。オレが柔道部に籍があった間の記憶ではこの青木先輩と宮下信一（28）先輩とが最も強い人だったと覚えている。

さて、A組で一緒になった級友に尾崎正介、滝沢軍次という秀才がいた。尾崎とは入学のときからいつも一緒だった。三年生のときからこの二人がオレのシンパになって卒業まで英語の試験の先生になって面倒を見てくれたんだナ。

思い出しても涙がチョン切れるヨ。

現在は勿論、昔だって秀才と名のつく奴は得てして利己主義の我利我利亡者が多いもんだが彼等は違っていたなあ。殊に四年から野球部に入ったオレに練習がきつくて大変だろうと同情もしてくれた。野球の練習ぐらい当時のオレにとっては大したことなかったヨ。スタミナあったナア。尤も時間があったって教科書を勉強する様な奴マじゃあないし、英語ってヤツは全く性に合わなかったネ。卒業する迄組替えはなかったがチョクチョク席替えがあった。然し何度変っても不思議のことにオレの前の席には滝沢か尾崎がいつもいるのである。特に英語の試験のときなどは答案の出来たやつからドンドン教室から出て行くんだナ、中には諦めて名前だけという奇特な奴もたまにはいたというが真偽の程はオレも分らなかった。ところでシンパの秀才は出来上ってもオレが答案を出すか、終了のベルが鳴るまで鉛筆を削ったりワザと消しゴムを落して答案をスラしてオレに見せてくれるんだヨ。泣かせるね。

だからといってオレは答案を全部ソックリ写す様な阿呆なことはしないヨ。普段出来の悪い奴が、試験のときだけ出来れば如何に鈍な先生でもこの野郎ヤッタナと疑ふのは当り前のコンコンチキだ、どっかの組で数人がカンニングペーパーを回して写したまでは良かったが間違ったところまで全く同じ、忽ちバレて全員○点とかまされたというドシ難い奴等もいたと聞いた。オレは義理にも秀才組に迷惑をかけるわけにはいかないからあれは何点、これは何点とチャンと計算して合格点すれすれのところで止めとくんだ。知能犯だネ。オレさまの頭の良いところだ。万才、オレは後年、尾崎にも滝沢にも最初に会ったとき開口一番礼を言ったらショウシイ顔をして困った顔をしてやがんの、孔子も顔負けのイイ奴である。

こんな友人である尾崎のヤツ数年前、オレより早く冥土の旅に赴いてしまった。オレにとっては掛替えのない友人だ。こんなもの書いていても涙が出て仕方がネエヤ、こんなオレにも毎朝通学途中時々出会う小柄で色白の可憐な一少女が目につくようになった。冬になるとシミて腫れ上る木レンガが敷きつめてある上田橋のたもとである。

（つづく）

TKC　コンピュータシステム
牧内会計事務所
(株)川口計算センター
所長・代表取締役　牧内　操（47期）
〒332　埼玉県川口市青木2―2―7　川口ビジネスセンタービル
【電話】川口（0482）51―3414（代表）

小林郷司事務所
公認会計士　小林郷司（40期）
（丸子町上丸子出身）
（税理士・中小企業診断士）
事務所　〒101　千代田区神田鍛冶町3―3（共同ビル）　電話（252）8801
自宅　〒177　練馬区関町4―甲743―9　電話（920）6736・6748

事務局日誌

はじめに

この第八頁には、「事務局日誌」、「住所変更者一らん」及び「第十四会大会の出欠返信中にきく会員の希望事項や問合せ事項」なども掲載する予定でいたが、別記の「五十年度、年会費納入者氏名一らん」を掲載したため、本号においては「事務局日誌」と「会員の死」報告」をのせ、外二項を割愛した次第、御了承を乞う。

×××　×××

昭和五十年五月二十一日（水）以降よりの事務局日誌を記す。

五月二十七日（月） 会報「うえだ」第十三号の最終編集会議ひらき、夜半二時に終る。大へんな努力だった。花岡編集長外五名。

五月二十八日（水）二十九日（木） 新橋の会報印刷工場に(35)花岡編集委員長始め各委員出張校正に終日つくす、委員十名の出勤であった、黙々と校正につくされしを多謝。

六月四日（水） この日、事務局に於て月例の王陀礼（わんだれ）会ひらかれ、前日に印刷上った会報「うえだ」第十三号の贈呈部数や会員への発送部数の仕訳に手助けを依頼。出席者一同、心より協力支援ありしを謝す。

六月二十三日（月） 午後六時より東京農林年金会館にて、四日後に迫った第十四回関東支部大会の打合せ「幹事会」開催、出席者四十六名、早速に協議打合せに入る、第四十八期生幹事が中心となり、今大会の諸計画につくすことに定り、「受付」「案内」「会場」「進行」等についての諸案を議し、大会の盛会を祈りつつ散会。

六月二十七日（金） 第十四回関東支部大会が、東京農林年金会館において開催された。その報告記は第一頁に詳細掲載されている。

七月二十一日（月） 上田市の同窓会館にて同窓会本部理事長、(26)柳沢文秋氏と会い、先般関東支部大会の節、故荻原実先生の「睡蓮」の絵、目下事務局に預り中なるも、何日届けるか、また同窓会館の何処え飾るかを打合せ、母校の先生方にも挨拶して帰る。

九月六日（土） 母校の在校生による松尾祭に例年招待を受けてた詳細は飯塚君の報告記参照されたし。

九月十六日（火） 長野県高等学校同窓会、東京連合会なる会合のあることは、本紙にもしばしば紹介はしてきたが、これをまた更に四地区に分けて東信地区高窓連の会合が本日開催された。会場はエビスにあるビール会社見学を兼ねての親睦会であった、東信地区十九校の中、上田東高、北佐久農高岩村田高、野沢北高、臼田高そしてわが上田高校の六校であった。

各校同窓会の運営の在り方など語り有意義であり親睦を深めた。

(23)大森支部長、(28)坂井副支部長外四名が出席した。

九月二十日（土） 東信地区そして上田市にある上田千曲高校同窓会の関東支部大会に招待され、本会を代表して参上した。二百有余の若い同窓生の盛大な大会であった。わが上田高校の関東支部とはまた異った雰囲気を感じ、楽しくひとときをすごさせていただいた

今後の親睦、大会の運営等において相互相はげましを約した。

九月二十三日（火） 本会の幹事会を東京農林年金会館でひらく。(30)尾台副支部長開会の辞に始り(23)大森支部長の去る六月に開催された第十四回大会の反省に対する挨拶あり、大略次の諸件が報告そして議された。

一、大会後の本会の経過報告と、大会についての反省の諸点を(36)神野幹事長から。

二、会報「うえだ」第十四号発行について、説明と協力を(36)花岡編集委員長から。更に

三、関東支部会員名簿作成について(31)矢島副支部長より計画と現況説明し、発行は明年五月に延引する件を提案可決された。(28)坂井副支部長が最終的に、各議件をまとめ閉会を宣して有意義に、幹事会は終了した。

十月七日（火） 本会創立当初より幹事を歴任された(19)布施信夫先輩逝去される。氏は柔和会の東京における会長もつとめられ

本会のためにも御尽力大なるものがあられた。(21)島田本会顧問始め幹事も多く参列、布施先輩の御めいふくを祈った。合掌、

十月二十五日（土） 第十四号について第一回の編集会議を、本会事務局にひらく、(36)花岡編集委員長外九名出席、分担など定む、

十月二十六日（日） 長野県人会連合会総会が、大手町産経国際ホールで開催され、初試案である「歌まつり」と称し、県下有志高校同窓会よりの出場も望まれ、去る幹事会においても賛同を得ていた故急き有志を招集、大会に臨む、六文銭の鉢巻と本会会旗を打振り、寮歌を高らかに歌い、上田健児の意気を示せり、出場者は(31)土屋、矢島(35)花岡、石倉(36)伊藤、神野(42)小林、以上七名なれど喬声、堂を圧す。

十一月十一日（火） 第二回編集会議を事務局にて開催(35)花岡編集委員長外九名出席、各員の原稿割当、広告の配分に誠心つくす。

十四号の完成に期待しつつ、解散十時なりき。（事務局・副支部長(31)矢島五郎）

おくやみ

つつしみて御冥福を祈り、御遺族様に、心よりおくやみ申し上げます。

●(7)三沢　竜起
昭和四十八年八月四日
御息女、中村敬子様より文書報告

●(9)岩崎　恒義
昭和四十六年
御遺族より文書報告

●(12)清水　芳勝
昭和四十七年十月十七日
御妻女様より文書報告

●(17)唐沢　泰平
昭和四十九年八月五日
御妻女順子様より文書報告

●(19)布施　信夫
昭和五十年十月七日
御子息敏郎氏より文書報告

●(22)小野　寅次郎
昭和五十年五月三十一日
御遺族より文書報告

●(23)茅野　清三郎
昭和五十年九月五日
同期大森頼雄氏より文書報告

●(26)岩下　博衛
昭和五十年五月三十日
御父上吉衛氏より文書報告

●(27)高橋　仁
昭和四十九年十月
御遺族より文書報告

●(30)渡辺　剛夫
御妻女まさ様より文書報告

以上・合掌

昭和五十年度・年会費納入者一らん表

（昭和五十年十月末日現在）

本会の年会費納入につきましては、会員皆様方の御協力に対し、深謝申上げています

我々の会報、我々の会合維持に更に一層の御支援をお願い申し上げます。追記、もし手ちがいから、この一らん表に掲載もれの方がございましたら、お手数でも、事務局まで御連絡下さい。

会計委員（47）牧内　操

(4期)高村喜平(5期)宮下寿(9期)岩崎恒義・古松国幹(10期)水野健吉(12期)小林幹雄・太田八郎・桂　敏夫・清水逸平・滝沢四郎(13期)長久保俊夫・志摩亮平・志摩喜一(14期)小宮山達・坂口　勇・荻原貞雄・宮本幸夫(15期)成沢一郎・山崎秀雄(16期)宮川義治・佐藤五郎・滝沢固太郎・矢島恭介(17期)小平貞次(18期)遠藤文介・小川栄一(19期)布施信夫(20期)小口春司・三井治郎・篠原現休・田口球司(21期)島田次郎・小池泰岳・土屋　暹・滝沢勝人・松平忠久・大日方孝二・若林　泰三・平島貴・所興曽平・長谷川長兵衛・芦田　中(22期)渡辺三郎・横田栄一郎・柴　弘人・柳沢正春・平林英一・宮下新重・宮沢勝次郎・柴田菊雄(23期)桑原民二・加藤清・大森頼雄・渡辺武彦・樋口格・小山正雄・木村禾武・小山朝政・三井良蔵(24期)太田道雄・樫山欽四郎・依田赴夫・小林健道・小山亮二・中曽根勝雄・滝沢中・茂木清文・柳沢晋一郎(25期)山岸　伏・三井忠直・馬場　長市・宮入　博・古池良三・斉藤　登高島兵庫・萩野喜次・石井正巳・児玉　晃(26期)小泉　寿・酒井諭一・上田政男・宮崎久登・石井公男・坂田隆雄・唐沢正美・小山正徳・高野　貢・宮下明義・田口喜一郎・西沢　信・小林敏政・馬場　武・後藤富平・滝沢　博(27期)稲垣正三・古沢精吉・小林忠人・中村　清・樋口達雄・滝沢昇・田中利雄・勝俣　拡(28期)坂井実雄・田中五郎・岡田重一・市川為雄・長谷川静吾・大塚忠夫・滝沢英栄・荻原政操(29期)橋詰二郎・沢　明人・大川善一・笠原文雄・鎌原義則・井村　薫・関政雄・若林元典・井本利一郎・町田尚久・北村四郎・森　四郎・山岸次郎・岩下美千穂・大塚毅矣・武藤矩靖・柳沢文正・坂田敏雄(30期)田尾　清・柳沢　厚・山岸一一・峰村文人・南波武英・尾台三吉・成沢省三・原　相模・柳田茂雄・奥山寿人・宮下武平・小林政泉・西沢秀聯・柳沢　眸・斎藤清・小山晴之助・渡辺嘉博・熊谷進司・菅沼祐蔵・沓掛友彦(31期)赤沼進吾・和田二見・宮下陽三・土屋　学・柳　達雄・矢島五秀夫・小出正夫・宇野重徳・原理・後藤長英・松島三男・中村正弥・山口宗吉・丸山　猛・沢田光雄・小山一平・萩原英之助(32期)山岸正喜・林　重夫・土屋勉・石井満明・高見沢澄平・西沢三郎・遠山忠雄・中村礼三・笹川徹・浅井　敦・安藤敏夫・大石祐文・荒沢寺利・平尾陸郎・池島雄三・岩田光弘・萩原在中(33期)竜野宗男・大塚義平・神津源一・佐藤佳良・森五郎・桜井勝次郎(34期)島津俊治・島川吉長衛・清水豊人・鷹野章士雄・林　亮巳・多田貞治・片岡英世・小林重昌・児玉潤一郎・清水好夫・柳沢年・若林彦六・神田積夫・工藤恭治・松井正直・小寺利治・土屋信夫・佐藤祐三・佐藤芳寿・横関直藤・戸町邦晴(35期)堀内啓爾・出浦哉一・神津勝時・石井　鴨関　輝雄・柳沢義房・花岡　儁・石倉謙一・城田　賢・小宮山隆三・北村武敏・久保田允・佐藤義仲・渋沢元則・宇野　智・渡辺達也・箕輪孝尚(36期)掛川重義・萩